

信州の環境にやさしい農産物認証 栽培事例（なす）

地域（標高）	下条村（600m）
土壌（土性）	黄色度（壤土）

項目	生産計画の内容	補足メモ
(1) 品目	米なす（品種：くろわし）	
(2) 作型名	露地夏秋栽培	
(3) 面積	7.5 a	
(4) 栽培戸数又は労働力	1戸 2名	
(5) 栽培期間	平成26年4月～平成26年11月	
(6) 収穫期間	平成26年7月5日頃～平成26年11月15日頃	
(7) 収穫量	H25実績 8,500 kg（うち出荷量：8,400 kg） H26計画 9,600 kg（うち出荷量：8,300 kg）	

2 栽培 方法	(1) 土づくり	平成26年4月20日堆肥散布																																																						
	(2) 播種	平成 年 月 日	セル苗購入																																																					
	(3) 育苗期間	平成26年3月27日～5月13日																																																						
	(4) 定植	5月14.15日																																																						
	(5) 肥培管理	<p>○化学肥料を50%以上削減するために導入している具体的な技術</p> <p>有機由来窒素源として豚糞堆肥、カニガラ粉末、魚粉、有機専科（菜種かす、魚かす、フェザー由来）を使用、有機入り配合肥料としてBBロングヒットオーガー（N有機50%）、有機パワー追肥018（N有機50%）合わせて使用している、結果77.6%の削減率となっている。</p> <p>○技術を導入する際の考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連作5年目で、連作障害の見えだした圃場での技術導入 ・土壌診断の結果、リン酸、カリ等塩基類が多いため堆肥は全面施用をせず畝施用で慣行より少なく施用 ・微生物資材及び米ぬかを混用し散布微生物の活用 ・土壌が粘性の高い赤土のため土壌改良にもみ殻・そば殻燻炭を土壌改良資材として施用し、物理性の向上に努めている。 ・有効態リン酸が多いためリン酸肥料を控え、強酸性液肥ソイルマスター602を試験的に導入しリン酸の有効活用を図る。 <p>肥料の施用内容</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">肥料の種類</th> <th rowspan="2">施用量 (kg/10a)</th> <th colspan="3">成分量(kg)</th> </tr> <tr> <th>窒素 うち化学由来</th> <th>リン酸</th> <th>加里</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>有機専科</td> <td>120</td> <td>8.4</td> <td>0</td> <td>4.8</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>BBロングヒットオーガー</td> <td>40</td> <td>4.0</td> <td>2</td> <td>2.4</td> <td>3.2</td> </tr> <tr> <td>カニガラ粉末</td> <td>40</td> <td>2.0</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>魚粉</td> <td>54</td> <td>4.3</td> <td>0</td> <td>4.7</td> <td>0.4</td> </tr> <tr> <td>有機パワー追肥018</td> <td>110</td> <td>11.0</td> <td>5.23</td> <td>1.1</td> <td>8.8</td> </tr> <tr> <td>ソイルマスター602</td> <td>20</td> <td>1.2</td> <td>0.6</td> <td>0</td> <td>0.4</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td></td> <td>30.9</td> <td>7.83</td> <td>15</td> <td>12.8</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <tr> <td>地区慣行施肥量 (kg/10a)</td> <td>35</td> </tr> <tr> <td>低減率(%)</td> <td>77.6</td> </tr> </table>		肥料の種類	施用量 (kg/10a)	成分量(kg)			窒素 うち化学由来	リン酸	加里	有機専科	120	8.4	0	4.8	0	BBロングヒットオーガー	40	4.0	2	2.4	3.2	カニガラ粉末	40	2.0	0	2	0	魚粉	54	4.3	0	4.7	0.4	有機パワー追肥018	110	11.0	5.23	1.1	8.8	ソイルマスター602	20	1.2	0.6	0	0.4	合計		30.9	7.83	15	12.8	地区慣行施肥量 (kg/10a)	35	低減率(%)
肥料の種類	施用量 (kg/10a)	成分量(kg)																																																						
		窒素 うち化学由来	リン酸	加里																																																				
有機専科	120	8.4	0	4.8	0																																																			
BBロングヒットオーガー	40	4.0	2	2.4	3.2																																																			
カニガラ粉末	40	2.0	0	2	0																																																			
魚粉	54	4.3	0	4.7	0.4																																																			
有機パワー追肥018	110	11.0	5.23	1.1	8.8																																																			
ソイルマスター602	20	1.2	0.6	0	0.4																																																			
合計		30.9	7.83	15	12.8																																																			
地区慣行施肥量 (kg/10a)	35																																																							
低減率(%)	77.6																																																							

2 栽培方法

(6) 病害虫防除

○化学合成農薬を50%以上削減するために導入している具体的な技術

- ・粘着版やトラップの利用で病害虫の発生予察を行い、適期防除に努める。
- ・気象状況を見ながら適期防除。病気は初発の確認、害虫は飛来、発生初期に防除する。
- ・圃場周辺ヘアザミウマ、アブラムシ対策（天敵の繁殖場所用）としてブルーサルビア、ソルゴーを定植した。

○技術を導入する際の考え方

- ・土壌性の病害の発生を抑えるため土づくりを行い、土壌の物理性、微生物環境を良くすることを基本とする。また、フザリウム抑制効果を期待しカニ殻を使用している。
- ・他の病害虫への対応はZボルドー、ポリオキシシALによる保護効果を利用、気象、草勢、病気の発生状況を確認し使用薬剤を決定して行く。
- ・害虫の発生は定植時のダントツ粒剤の植穴処理を行い、その後はBT剤の利用を検討。さらに気象や草勢、害虫のトップへの飛び込み状況を確認し使用薬剤をきめる。

病害虫防除の内容

	使用農薬名	倍率・使用量	有効成分数	散布回数	成分カウント	除外カウント	慣行回数への付加カウント	地域慣行農薬使用回数
殺菌剤	Zボルドー	500	1	2	2	2		12
	ポリオキシシAL水溶剤	5,000	1	2	2	2		
	アミスターオブティフロアブル	1,000	2	1	2			
	ベルコート水和剤	3,000	1	1	1			
	ランマンフロアブル	2,000	1	1	1			
殺虫剤	ダントツ粒剤	1g/株	1	1	1			9
	ウララDF	2,000	1	1	1			
	ダニサラバフロアブル	2,000	1	1	1			
	ハチハチ乳剤	1,000	1	1	1			
	フェニックス顆粒水和剤	2,000	1	1	1			
	ディアナSC	2,500	1	1	1			
	スピノエース顆粒水和剤	5,000	1	1	1	1		
コロマイト乳剤	1,500	1	1	1	1			
除草剤	バスタ液剤	1,000	1	1	1		1	
					合計	17	6	22

農薬の使用回数	11
地区慣行農薬使用回数 (kg/10a)	22
削減率(%)	50.0%

(7) 雑草防除

・雑草防除は機械除草、マルチ栽培・防草シートの利用と敷き草・敷き藁などの利用し、除草剤使用は抑える。

(8) 収量の状況

昨年度並み1.2 t /10a

(9) その他特記事項

3 販売状況

(1) 主な販売地域

JAの配送する地域、下伊那地域直売所

(2) 販売方法

JA(市場流通)、農産物直売所

(3) 県認証の活用方法

現在特に活用はしていないが今後取り組みがわかるように認証票の表示を行いたい

(4) 実需者や消費者の反応、メリット

認証がわかるような認証票の表示をしていないためわからないが、今後は認証マークを表示して販売したい。

